

白米と豆





むかしむかしの^{おおむかし}大昔。わたしたちが^{す こまつ}住む小松のおはなし。^{やま}山のムラに^す住むミケは、^{げん き おとこ こ}元気な男の子。
 いつものように^{いっばい}いっぱいあそんで、おなかを^{いす かえ}すかせて家に帰ると、お父さんの^{とう}ミチが^{なに}何かを^{てい}手入れしています。
 「わ〜！新しい^{あたら}弓矢だ！」^{ゆみ や}「そうだ、^きかっこいいだろう？」^がミチは^{ゆみ や}とくい顔です。^{きょう}この弓矢で今日は^がりっばな^{きょう}シカをしとめたのです。
 その肉と、山でとれた木の^き実で、お母さんは^{かあ}ごはんをつくります。わたしたちの^{せんぞ}せんぞは、このように、しぜんのめくみをもらって^{くら}していました。



やま き は あか
山の木の葉が赤くそまるころ、ミケたちは、山にどんぐりを集めにいきます。ふゆ た もの
冬は食べ物が少ないので、ほそんできるとどんぐりは大切です。
らいねん はる
来年の春までもつように、できるだけたくさんほしいのですが、
ことし あつ
今年はなかなか集まりません。「こまったなあ…このかごいっぱいほしいのに…」
ひっし やま まいご
必死にさがしているうちに、ミケは、山で迷子になってしまいました。「おなかへったよお…ぐすん。」



「だいじょうぶ？よかったら、これ^た食べる？」^{きゅう}急に^{こえ}だれかの声^{かお}がしました。びっくりして顔をあげると、めずらしい服^{ふく}をきた女^{おんな}の子^こが、見たこともない食^みべ物^{もの}を持^もって、ミケ^{しんぱい}を心配^みそうに見^みつめていました。

「いいの？ありがとう！ねえ、きみはどこからきたの？」

「タニハのクニ^{かわ}から川^{かわ}べのムラ^{かわ}にひっこしてきたの！わたしはメイコ。後ろ^{うし}にいるのがお父^{とう}さんとお母^{かあ}さんよ。」



はなし
 話をきくと、メイコたちは、なんとミケのムラへいくとちゅうで、ミケは、いっしょについていくことになりました。
 ミケがあんしんすると、おなかがぐーぐーなりだしたので、メイコにもらった食べ^た物^{もの}を ^{ひとくち}一口ほおばりました。
 「わぁ！これ、おいしいね！初めて食べるよ。」「ほんと？これはお米^{こめ}っていうのよ。田んぼでそでてるの。」
 「お米？田んぼ？それって何？」 ^{はなし}いろいろな話を聞きながら、ミケはぶじにムラにかえることができました。



「とーちゃん、ただいま！お客さんがきたよ！」いえにつくとミケはさっそく、メイコたちを家族にしようかいました。
「はじめまして、わたしはタヒコと言います。せいなる石をもとめて、西のタニハのクニから船でわたってきたんです。」
「ほお、遠いところからよくきたね。せいなる石のことをもっとときかせてくれるかい？」「ええ。とっても力がある石なんです、ミドリ色で美しくて…」
タヒコの話聞くうちにミチはなにかを思い出しました。「ああ！その石はたぶんヘキギョクじゃな。少し遠いが、エヌの山まで行けば、たくさんあるよ。」



「わたしたちのクニでは、せいなる石で首かざりを作るのです。クダタマ^{くだたま}といって、石をくだき、このようにほそくけす^くたあと、あなをあける。とてもせんさいなさぎょうですよ。」タヒコは、ミチにじまんげにクダタマのつくりかたのせつめい^しいはじめました。

「ふーむ、こりゃすご^みい。やねにつかうカヤのくきのようだ。これだけでもびっくりなのに、さらにあなをあけるとは……しんじられん。」

ミチは、タヒコが見せてくれたクダタマのあなをのそいて、かんしんするばかりです。

「ふふ、こんどわたしのムラにもごあんないしましょう。そのときにクダタマのくびかざりをお見せしますよ。」



はなし
話をしていると、ミケが^{かあ}お母さんと^{なに}いっしょに何かをもってきました。「ほくたちの^{ちから}たからものも、^もせいなる力を持ってるんだよ！マガタマっていうんだ！」
「すごーい！キラキラして、とっても^{ほんとう}キレイね！」「本当だ！それに、^{おな}同じミドリだが、これは^{めだま}リュウの目玉のよう^{うつく}にとうめいで美しい…
ミケ、これは^{いし}なんて石だい？」メイコたちに^いほめられて、ミケは^{はな}じまんげに^{はな}話します。「これは^{ひすい}ヒスイって石で^{つく}作ったんだよ。東の^{いし}又ナのクニでとれる石でね。
父ちゃんたちが、ときどき^いわけてもらいに行くんだ。」みんなで^{たの}楽しく話していると、すっかり日は^ひくれていきました。



その日の夜、メイコたちをちょうろうの家へあんないし、ごちそうでもてなしました。話^{はなし}がもりあがる中、
「もしよかったら…山^{やま}をおりて、わたしたちといっしょにムラをつくりませんか？ 知らない土地^{しち}での米^{こめ}作りも、みなさんがいたら心強い…
わたしたちが作り方を教えましょう。」と、タヒコが話をもちかけました。「わあ！ すごい！ かあちゃん、米^{こめ}を作れば、ほそんでできるんだって！
どんぐりが少なくても安心^{あんしん}だよ！」「お父^{おとう}さんも、きけんなかりをしなくてすむかねえ。大よろこびのミケたちを見ながら、ちょうろうはやさしく言いました。
「ワシらとしよりは、神様^{かみさま}からさずかったこの山^{やま}をおりるわけにはいかん。 けれども、わかいモンで協力^{きょうりょく}して、新しいムラをつくるとよい。」



こうして、ミケたちの新しいムらづくりがはじまりました。 そんなある日、ミケは、タヒコをエヌの山へとあんないました。
「ボクたちは、この山にヤジリをつくるリュウモンガンをとりにくるんだけど、ほら、ヘキギョクもたくさんあるんだ。」
「すごい！これでクダタマがたくさん作れるよ！そういうば、ミケくんは、まだクダタマを見てなかったかな、帰ったら見せてあげよう。」
「ほんとに？やったー！」 ミケたちは、ひつような分のヘキギョクをとると、ムらに持ち帰りました。



「ただいま、メイコ。クダタマのくびかざりをもってきてくれるかい？」「はい！」クダタマをみせてもらったミケは、目を丸くしました。
「これがクダタマ…！！こんなに小さいあながあけられるなんてスゴイや！！ あれっ！？父ちゃんこれって！」
「ああ、おれたちのマガタマだ！フム、すばらしい…」メイコがもってきたのは、ふたつのムラのたからを組みあわせたものでした。
これにはタヒコもびっくりです。「すてきでしょ？お母さんたちとかがえたの。」「ああ！これはすこいたからものだよ、メイコ。
できたばかりのこのムラを、これで知ってもらおう！」



うつく^くしい^く首^くかざりの^くうわさは、なんと、メイコの^{にし}ふるさとよりもっと^{にし}西^{にし}の^{にし}ツクシ^{にし}の^{にし}クニ^{にし}の^{にし}王^{にし}の^{にし}耳^{にし}にまでとどきました。
「わたしもぜひ、^{うつく}美しい^く首^くかざり^くを見たい。ここにその^おムラの^おものを^および^およせるのだ。」^お王^おの^おまね^おぎで、^おタヒコ^おたちは^お船^おで^おツクシ^おの^おクニ^おへ^お向^おかい^おました。
ツクシの^とクニ^とは^ととても^と遠^とい^とところ^とに^とあり、^{なん}何^{なん}日^にも^に船^{ふね}を^{ふね}こ^{ふね}が^{ふね}な^{ふね}ければ^{ふね}なり^{ふね}ませ^{ふね}ん。 ^{てん}天^{てん}気^きが^きわ^きる^きく、^う海^うが^うあ^うれる^う日^ひも^ひあ^ひります。
「みんな、^{なみ}波^{なみ}に^{なみ}向^{なみ}か^{なみ}つ^{なみ}て^{なみ}ま^{なみ}っ^{なみ}す^{なみ}ぐ^{なみ}こ^{なみ}ぐ^{なみ}んだ^{なみ}！^{なみ}が^{なみ}ん^{なみ}ば^{なみ}れ^{なみ}！」^ふ船^ふが^ふて^ふん^ふぶ^ふく^ふし^ふな^ふい^ふよう^ふに、^ほタ^ほヒ^ほコ^ほは^ほす^ほす^ほむ^ほ方^{ほう}向^{こう}を^{ほう}し^{ほう}じ^{ほう}し^{ほう}な^{ほう}が^{ほう}ら、^ここ^こい^こで^こい^こる^こみ^こん^こな^こな^こを^こは^こげ^こま^こし^こます。



タヒコたちは、とちゅう、タニハのクニとイズモのクニでやすみながら、ツクシのクニをめざしました。そして、やっとのことでツクシのクニにたどりつきました。
「王さま、ごらんください！これが、わがムラじまんのミドリたまの玉くひの首ちからかざりでございます。」
「どれ…これは！なんとみごとで美しいのだ！おお、玉たまよ…われに力を、そしてタヒコのムラに、人々ひとに安らやすぎをあたえたまえ…！」
タヒコはとてもきんちょうしていましたが、ツクシ王は首あうかざりをたいへんくひ気に入ったようで、タヒコは、ほっとむねをなで下ろしました。



ツクシのく^{かえ}にから帰ったタビコたちをむかえと、何やらおみやげをもっていました。

「ただいま。ツクシのま^{おつ}さまに首かざりをほめていただいてね、すごいほうびをくださったんだ。」 「おお！こりゃテツのオノじゃないか！うわさにはきいていたが、ほんものははじめてだ！」ミチはおどろきをかくせません。なにしろ、ミチたちにとっては、そのくらいにテツはめずらしいものだったのです。

「ねえ、ミケ！このオノ^{オノ}があれば、ムラがもっとよくなるよ！」「やったー！これもみんなヘキギョクのおかげだね！」

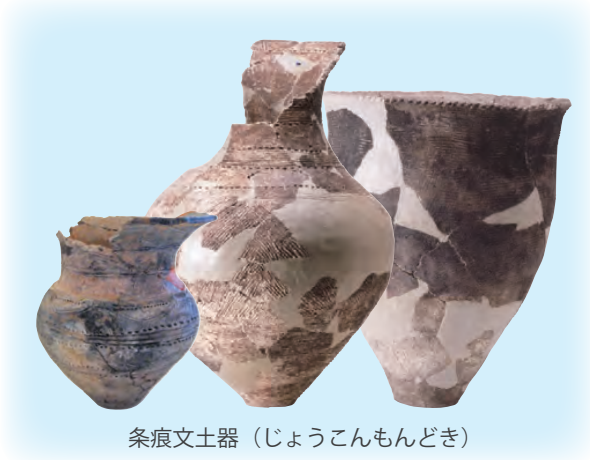
これからのムラづくりが楽しみになったミケとメイコは、目^めをあわせてわらいました。



それからしばらくたって…。ミドリ^{たま}の玉のくびかざりのひょうばんはさらに^{ひろ}広まり、ミケたちのムラにやってくる人々もふえました。
 あれから^{おお}ムラは大きくなり、くらしもゆたかになりました。秋^{あき}には、みの^{こめ}ったお米で、田んぼ^たがこがね色^{いろ}にそまります。
 もう^た食べ物に^{もの}こま^{おも}って、かなしい思いをすることもありません。
 人々^{ひとひと}をしあわせにする力を^{ちから}ひめたヘキギョク、それは、^{いま}今も小松^{こまつ}の山^{やま}の中^{なか}でしずかにねむっています。



櫛描文土器（くしがきもんどき）



条痕文土器（じょうこんもんどき）

この物語は、^{やよいじだい}弥生時代の小松を舞台にしています。

ミケが住んでいたのは、縄文時代の伝統的な暮らしを続ける山の集落です。そこへ、「タニハのクニ」から小松へ引っ越してきたメイコの家族が訪れます。

メイコの父・タヒコが提案した「新しいムラ」は、^{ようかいちじかた}八日市地方遺跡がモデルです。発掘調査では、弥生系の櫛描文土器、縄文系の^{じょうこんもんどき}条痕文土器と一緒に出土しました。

八日市地方の集落の発展とともに、これらの土器の特徴は世代を重ねて融合し、「^{こまつしき}小松式」と呼ばれる独特な弥生土器が誕生しました。



小松式土器（こまつしきどき）



ミドリの玉の
くびかざりを
王さまに
みせにこう!



ツクシのクニ

ミドリの玉の
くびかざりが
みたいぞ!

九州地方

中国地方

イズモ

すごーい!

くびかざりのうわさ

四国地方

中部地方

いしかわ
エヌ



ミケのムラ

よばれてツクシのくにへ

タニハのクニ
(メイコのお城)

ひたし
お米あしお

エヌの山

ヒスイとこころん
ナカヨシ

石をさがしに
いく



ヌナノクニ



ミケのムラのようす

関東地方

みずうみ

川をいだ
たくさん
とれる

エヌの山



炭化米



石包丁

八日市地方^{ようかいじかた}の集落は、小松に新しい文化をもたらしました。中国大陸から北部九州に伝わった米作りは、その代表的なものです。

縄文時代^{じょうもんじだい}にはあまり利用されなかった潟の周囲は、ヨシのしげる湿地から、お米がたくさん取れる水田に生まれ変わりました。

米作りに使う道具は^{くわ}鋤や^{すき}鋤などの農具ですが、弥生時代には、刃の部分も含めて全て木で作られました。しかし、現代の私たちも知っている鋤やスコップと形がよく似ていて、八日市地方の集落で作られた農具は、既に機能的な形態を備えていたことがわかります。



鋤 (くわ)



田げた

水田経営が軌道に乗ると、集落は大きくなり、人や物の交流も活発になりました。

集落は、川の両岸に沿って居住域があり、その周囲が環濠^{かんごう}（ほり）で囲まれ、いちばん外側にお墓がつけられました。



鋤 (すき)



田舟



旧河道（きゅうかどう）の調査



環濠（かんごう）の調査



砥石と碧玉（へきぎょく）片



建物跡



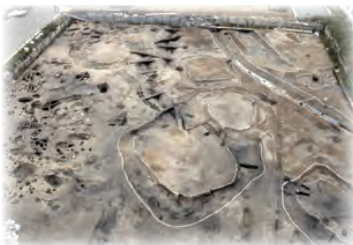
建物跡



環濠（かんごう）の調査



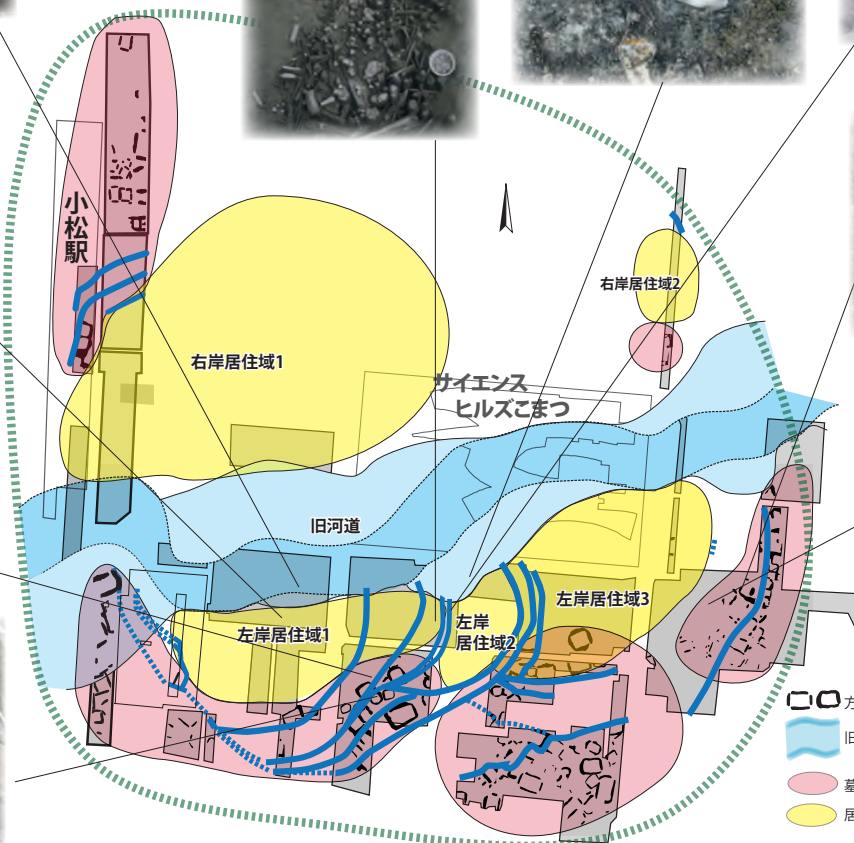
四角く溝をめぐる墓



お墓にそなえられた土器



まとめてすてられた土器



□ 方形周溝墓（四角く溝をめぐる墓）

旧河道

調査完了区域

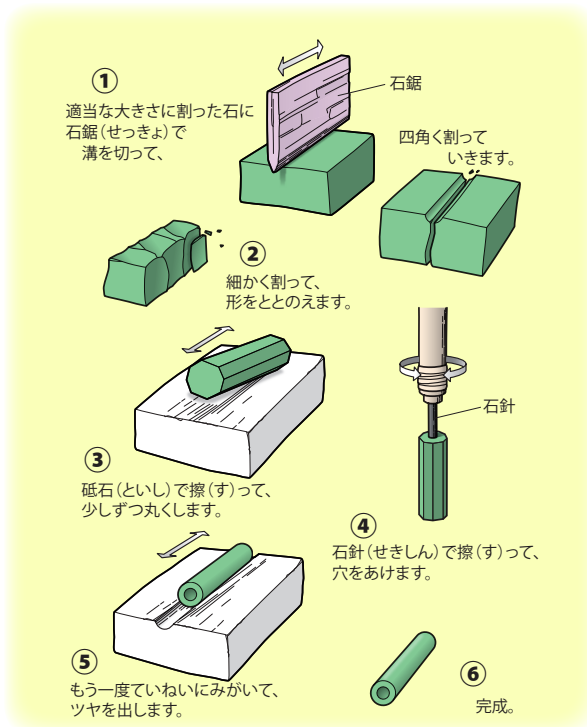
墓域

遺跡推定範囲

居住域

環濠

0 10 50 100m



管玉(くだたま)の製作工程



石針(せきしん)の製作工程

石鋸(せっきょ)

小松市^{な た}的那谷町・^{ぼ だい}菩提町・^{た き が はら}滝ヶ原町の山間部(物語では「エヌの山」)には、「碧玉」と呼ばれる緑色の美しい石がたくさん取れました。これを材料にした「玉作り」は、^{へ き ぎ ゅ く}八日市地方^{よう か い ち じ か た}の集落の重要な産業でした。

碧玉で作ったのは「管玉」といい、直径2mmほどの円柱形に^{せ き し ん}「石針」を使って1mmほどの穴をあけます。物語でタヒコが言ったとおり、とても繊細な作業です。

碧玉のほかに、^{い と い が わ}糸魚川(物語では「ヌナのクニ」)産の「ヒスイ」も交易で入手していました。ヒスイは、縄文時代から宝石として珍重されていて、八日市地方の集落では^{ま が た ま}「勾玉」を作りました。



管玉(くだたま)の製作工程



鉄斧（てつぷ）の柄

小松産の碧玉^{へきぎよく}は、西日本を中心に日本列島の広い地域に運ばれたことがわかっています。八日市地方の集落は、首飾りだけでなく、玉作りの材料としての碧玉の一大供給地でした。

物語では、「ツクシのクニ」まで首飾りを運んでいます、中国大陆と直接交易している先進的なクニとして描いています。褒美としてタヒコが受け取ったのは、弥生時代の先端技術の象徴としての「鉄器」でした。

八日市地方遺跡の出土品では石の斧が一般的ですが、集落がもっとも発展した頃以降の地層からは、鉄斧^{てつぷ}の柄も出土します。

さらに近年の調査から、鉄製のヤリガンナ（木を削る道具）が柄を装着した完全な状態で発見されました。



石剣（せっけん）と鉄製ヤリガンナ

* 鉄製ヤリガンナは石川県埋蔵文化財センター所蔵

白いお米とミドリの玉

令和2（2020）年3月23日 発行

編集：小松市（にぎわい交流部埋蔵文化財センター）

〒923-0075 石川県小松市原町ト77番地8

電話（0761）47-5713

発行：小松市（にぎわい交流部観光文化課）

絵：雨沢 晴人（イラストレーター）

協力：新井 浩（金城大学短期大学部美術学科 准教授）

大谷 友理（金城大学短期大学部美術学科 講師）

印刷：マルト株式会社